

第2言語学習者はテキストをどう読んでいるか

既有知識の活性化と一貫性の形成

大隅敦子

〔キーワード〕 第2言語、読解、スキーマ、推論、一貫性

〔要旨〕

スキーマ理論は、第2言語学習者に対する読解教育にも影響を与え、教室活動においても、既有知識の活性化を図る様々なくふうがなされている。一方スキーマ理論についてはスキーマがどのように起動されるのか、またいったん形成されてしまうとフレキシブルではないのではないかという批判もある。20人の読み手に『注文の多い料理店』を簡易にリライトしたものを読んでもらい、メモデータ、補足的な聞き取りデータから結果を分析したところ、読みに困難があった読み手は、手がかりに応じて読みが変わり、全体を首尾一貫した読みが形成されていなかった。

認知心理学者 Kintsch (1995) は、読解過程についてテキストから構築された命題およびスキーマなどの既有知識は一貫性を以って統合されると述べている。読解のプロセスにおいては、スキーマなどの既有知識の活性化とともに、一貫性形成の志向も重要だと考えられる。

1. 先行研究の検討と調査の目的

1.1 第2言語における読解教育とスキーマ理論

スキーマについての研究は心理学の分野で始められた。Bartlett (1932) はそれまでテキストの解読と考えられていた読解を、読み手がテキストを再構成する過程と捉えた。

さらに Rumelhart and Ortony (1977) は知識を、長期記憶内に貯えられている、「スキーマ」という構造を持つものとして提示した。彼らによればスキーマは以下の性格を持ったものだという。

いくつもの変数からなり、各変数にはデフォルト値が決まっている
階層的構造を形成する (hierarchically organized)
さまざまなレベルにわたる抽象度の総称的概念を表現する
百科事典的な概念的知識の表現である

スキーマについての研究成果は第2言語教育においても利用されるようになった。Carrell (1983: 558-562P) はこの分野において、テキストの理解を、読み手の背景知識とテキストの相互作用過程であると捉えている。そしてスキーマのすべての相がテキストからインプットされた

情報と両立していくトップダウン処理(概念駆動型処理)と、すべてのインプットが今存在するスキーマにマッピングされるボトムアップ処理(データ駆動型処理)が同時並行的に起こるとした。また物語文や説明文といったテキスト形式、修辞、構造に関する形式スキーマと、テキスト内容に関する内容スキーマとの別を提示した。

さらに Carrell (1984: 334-338P) はスキーマ理論の読解授業への応用として、テキストを読む前に読み手に背景知識を与えたり、トピックに関する写真やイラストを見せたり、題名から内容を予測させたりすることなど、スキーマを活性化させるための活動を提唱した。これらのことは現在でも読解の授業方法として、言語教室で広く行われている。

スキーマ理論は、それまでテキスト要因を重視していた読解研究が、読み手要因を考えて行く際の有力な枠組みを提供した。しかしたとえば Alderson (2000: 47P) は、スキーマ理論に対してどのようにしてスキーマを起動するのか、類似性が手がかりならばどのようにして類似性に気づくかなどの点が明確になっていないなどの批判があると述べている。すなわち具体的なスキーマ起動の過程、テキストからもたらされる新しい情報が、読み手が既に持っている知識とどのように結びつくか、つまり概念駆動型の読みとデータ駆動型の情報処理がどのように作用して読みが可能になるのか具体的に説明されているとは言えないのである。

1.2 読解における「推論」の研究

前項で述べた Alderson (2000: 47P) で提示された「どのようにしてスキーマを起動するのか、類似性が手がかりならばどのようにして類似性に気づくか」等の点については現在、推論の観点から研究が進んでいる。

中島ほか編(1999: 465P)では推論(inferences、reasoning)とは「既知の前提から新しい結論を導き出す思考の働き。また、その過程や結論」と定義している。さらに読解に関しては阿部ほかによる「文章(の一部あるいは全体)を理解するために、そこに明示的に表現されていない情報を、そこに明示的に表現されている情報に基づいて、文脈表現や知識を利用して探す、あるいは導く(1994: 212P)」という定義がある。ここでは後者を中心に、さらに推論に思考の働きとその過程・成果を含めると明示している前者の見解を加えて以下の通りの定義とする。

推論とは、文章(の一部あるいは全体)を理解するために、そこに明示的に表現されていない情報を、そこに明示的に表現されている情報に基づいて、文脈表現や知識を利用して探す、あるいは導く思考の働きとその過程、成果をさす。

推論に関してまず分類されるのは、「橋渡し推論(bridging inferences)」と「精緻化推論(elaborative inferences)」の二分類である。前者はテキストを理解するために必ず行われなければならない、情報をつなぐ推論であり、オンラインで(読解中に)行われる。後者はテキスト内容をさ

第2 言語学習者はテキストをどう読んでいるか

らに豊かにする、あるいは精緻化する推論であり、オフラインで（読後に）行われると見られる。必要不可欠なプロセスではないので、読み手によっては必ずしも生成されないことがある。

また Grasser, Singer, Trabasso (1994) は「橋渡し推論 (bridging inferences)」と「精緻化推論 (elaborative inferences)」に関連して、推論を生成される時点により 3 分類し、さらに推論内容によって 13 のタイプに分けている（表 1 参照）。本稿ではこれらの推論の分類も、分析の参考としたい。ただし推論が発生してもかならずしも内容と一致した理解につながると言えないのは、日常的によく経験することである。テキスト情報があり、それに基づいて行われる推論があり、さらにそれを読みにまとめるためにどのような過程があるのだろうか。教室を一步出れば読解は与えられた情報から適切な理解を得ようとする行為であり、推論をどう行っていくか、また既有情報、テキスト情報と推論の結果をどのように組み合わせて適切な理解に構成していくかは読解研究の主要なテーマと言える。これについて提言を行っているのが認知心理学者 Kintsch (1988, 1995 : 49-120P) の構築統合モデルである。

表 1 推論の 13 のタイプ (Grasser, Singer, Trabasso : 1994) より、表の形にまとめた

<p>1. オンラインの推論（テキストを読み進む途中で必ず生成される—橋渡し推論）</p> <p>(1) 照応関係の推論</p> <p>(2) 文法上の格を判別する推論</p> <p>(3) 原因を探索する推論</p> <p>(4) 登場人物の行為の究極の目的あるいは動機、意図を見出す推論</p> <p>(5) テキストの主題を探索する推論</p> <p>(6) 登場人物の心情を理解する推論</p>
<p>2. オフラインの推論（読解中に生成される可能性がある—精緻化推論）</p> <p>(7) 結果を予測する推論</p> <p>(8) 名詞句の内容を具体化する推論</p> <p>(9) 道具についての推論</p> <p>(10) 登場人物の行為についての推論</p> <p>(11) 現在の状況に関する推論</p>
<p>3. いつ生成されるか判別できない推論</p> <p>(12) 読み手の感情についての推論</p> <p>(13) 作者の意図についての推論</p>

1.3 構築統合モデル (Construction and Integration Model, C-I Model)

Kintsch のモデルは、まずテキストに書かれた言語から命題が構築されるところから始まるが、本稿で特に取り上げたいのはテキスト情報から構築された命題や、読み手が既に有している命題、スキーマ、フレーム⁽¹⁾、スクリプト⁽²⁾などの既有知識、および生成ルールといったノードから、

読み手が連想ネットワークの活性化と安定を通じて読みを統合していくという部分である (Kintsch1995: 49-92P)。Kintsch (Kintsch1995: 93-120P) は従来のスキーマ理論をトップダウンのコントロールが強過ぎるとし、「トップダウン読みを排除しないが、よりボトムアップ読み、つまりテキストから得られる、よりゆるく広く取られたノードから一貫性によって理解が構築される」と考えた。そして様々なリソースからの情報によってネットワークのノードが活性化される一方、それらが矛盾なく統合されることによって安定し、その結果首尾一貫した理解が形成されるという読みのモデルが示されている。一貫性は読みの統合過程に必要な不可欠であり、またその結果テキストが意味あるものとして成立することを支えるものとして重要な役割を果たしているという。なお Kintsch のモデルでは、一貫性の有無、あるいは大小は潜在意味分析 (LSA)⁽³⁾ によって近似的な数値から判断することができるとしている。

これを非常に大きくまとめれば、Kintsch は、読みの過程を、テキストから構築された命題、および既存の命題、スキーマ、フレーム、スクリプトなどの知識、さらに読解中に発生する推論などを通じて統合しつつ一貫性を形成する過程と捉えていると言える。

次章以下、この構築統合モデルを理論的支柱として行った、今回調査の方法を述べることとする。

2. 調査の方法

2.1 テキストの概要

宮澤賢治著『注文の多い料理店』は、二人の男が空腹でレストランに入り、そこでレストランらしからぬ様々な指示を受けておかしいと思いつつもその通りに準備をして食事を待つ。しかしそこは実は料理を食べさせてくれるレストランではなく、人間が料理として食べられるレストランだったということがわかる、というものである。

この物語は日本の小学校から高校の国語の教科書でも取り上げられ、沖山 (1991) の授業記録によれば、最初は料理店が出てくると思っている小学生も、物語が展開するにつれ「おかしい」「あやしい」そして「食べられてしまう」と考えるようになる。また留学生対象の授業記録 (三門: 1995) においても、読者が展開に沿って与えられるヒントから、段階を踏んで物語を理解できるようになることが述べられている。すなわちネイティブにあってもノンネイティブにあっても、物語の始まりにおいて読み手の頭の中ではレストラン・スキーマが起動するが、登場人物に与えられる様々な指示の形で投入される手がかりがそのスキーマを裏切り、意外な読みの形成に導くさまが観察されているのである。

2.2 対象者

本調査の対象は、日本語国際センター長期研修生 20 名 (いずれも 20 代後半)⁽⁴⁾であった。こ

第2 言語学習者はテキストをどう読んでいるか

の20名の母語はモンゴル語、タイ語、インドネシア語、マレー語、英語、スペイン語、ウクライナ語、ウズベキスタン語、リトアニア語など、多岐にわたる。全員調査日より前後一週間以内に行われたコース内試験において日本語能力試験3級相当の実力は持っており、うち半数は2級合格の実力も持つと見なされた（参照したのは読解・文法のうち読解部分のみ）。またOPIでは中 - 中から上 - 上と判定されている。

2.3 テキストの選択と本調査で要求される「読み」

調査を行うにあたり、テキストには以下の条件が必要と考えた。

ストーリーが開始時に持つスキーマとその後の展開の矛盾という観点から、

構築過程を比較するために、当初は全員が均質なスキーマを持つ

読み手が当初のスキーマからは予想できない展開と結果を持つ

テキストのリーダビリティという観点から、

この調査は漢字・語彙の理解を調べるものではないので、出現する漢字・語彙については読み手に負担をかけないように3級程度にコントロールする

またストーリーの展開を表現する文にしぼってリライトし、展開を読み取りやすくする

調査のための区切りという観点から、

テキストは手がかりを投入するごとに区切って、読みの変化を記録する

以上の ① の条件を満たすテキストとして、宮澤賢治著『注文の多い料理店』を選択し、②の条件を満たすため、表記は現代かなづかいに直し、漢字・語彙のレベルは3級程度に、分量も全体で1,230字程度に絞った。また ③によりテキストは全部で7つの部分に区切られた（テキスト本文は表3-2参照）。

この物語は前述のとおり国語の授業で広く扱われ、また多彩な読み手による評論活動が展開されているなど奥行きも深い。本調査では「料理を食べることのできるレストランでなく、人間が料理として食べられてしまう場所である」を、要求される読みとして中心的に取り上げることとした。

2.4 手順

テキストには12項目の手がかりを設定した（表2参照）。

① はレストランからの挨拶や説明で言説のレベル。レストランらしくない、どこかおかしい印象である。

②、③、④（ ） はレストランから、明らかにレストランらしくない奇妙な行為を具体的に指示するもの。塩、クリームなどの調味料をふりかける対象が自分の体、というところから自身が食べられる可能性を暗示する。

本来客が店に注文を出すという行為が逆転していること、店と客との関係が逆転していることに二人が気付いたことを示している。

レストランの意図がわかって「来た人に料理を食べてもらう場所ではない」こと、さらに「来た人を…」とヲ格を用いることで動作の他動性[来た人ヲ食べる]を示唆している。

通常のレストランではない逸脱が示唆される。

さらに ではそれに対する二人の恐怖心が示されている。

レストラン側からの「フライになりたいですか」という問いかけは「人間が食べ物になる」という、本稿で設定したテキストの読みを表現している。なお「<名詞>になりたい」は初級文型であり、調査対象者全員、既習事項である。

そのほか「ドアが多い」「(客が)やることが多い」は全体に見られる手がかりであり、どれもレストラン・スクリプトからの逸脱を示している。

表2 『注文の多い料理店』テキスト内の手がかり

ページ	テキスト内の手がかり
1	遠慮しないでください
2	とくに太ったお方や若いお方は、大歓迎します このレストランは注文の多い料理店です。よろしくお願ひします
3	びんのなかのクリームを、かおや手足にぜんぶぬってください
4	あなたの頭に水をよくかけてください ところがその水は、どうも酢のような匂いがするのです
5	これが最後の注文です。体中にこの塩をたくさん塗ってください
6	たくさんの注文というのは、店がこちらへ注文して来ているんだ このレストランは来た人に料理をたべてもらうのではなく、来た人を... 二人はもう、何も言えませんでした。
7	サラダはおきらいですか。それならフライになりたいですか 二人はこわくてこわくて、もう何も言えませんでした
そのほか (全体的に)	ドアが多い やることが多い

2.5 分析方法

調査は以下のとおりに進められた。テキストは表2の通り7つの部分に分かれている(テキスト全文については表3-2参照のこと)。1枚目を読み終わったところでまず回収し、「ここはどこですか」「これから何をしますか」という最初の問いを投げかけ、答えを記入させる。そこで調査の進め方を説明し、以降は1枚読み終わったら前と同じ問いに対する答えの変化を中心に自由記述を書き込ませたのち回収し、次の紙を渡した。制限時間は特に設けずに、20分~50分ほどで行った。さらに全部読み終わった時点で、1.テキスト内に設定された手がかり、および2.

第2 言語学習者はテキストをどう読んでいるか

書き込まれたマークや記述について調査者がインタビューを行い、読み手に最初の理解が変わった理由や新しい理解を得た理由をくわしく聞き取るという方法を取った。インタビューの時間は一人20～40分程度である⁽⁵⁾。最初と最後に同じ質問を繰り返したのは、最初の質問でレストラン・スキーマの起動を確認し、最後の質問でこのテキストを読んで形成された理解を確認するためである。

なお前述した通り、全員日本語 OPI は中 - 中以上を取得しており、「文を自分なりに作ることができ、対話の相手がよく聞いて理解を示してくれる場合には、個々の独立した文、あるいはいくつかの文が続いた形を使って、言語要素を組み合わせる自分なりのメッセージを伝えることができる」という中級の口頭能力を100%維持することができる（ACTFL 言語運用能力基準 - 話技能：1999）。したがって本調査のようにインタビュアーが、限られたテキスト内の手がかりについて時間をかけて質疑応答を行った場合は、各人なりの回答ができるものと考えた。

データは以下の表3-1、3-2にまとめた。2.1で設定した本調査での「読み」、「そこで料理を食べることのできるレストランでなく、人間が料理として食べられてしまう場所である」にたどりついた読み手は表3-1に、グループ、読み手番号1～14でまとめられ、たどりつかなかった読み手は表3-2にグループ、読み手番号21～26でまとめられている。なおメモデータはそのまま、インタビューによって補足されたデータは（ ）に入れて提示した。

3. 調査結果の検討

3.1 物語の進行と読みの展開

以下、表3-1、3-2を見ながら、1.2で述べた「推論」、1.3で述べた「一貫性」という観点から、採取されたデータをもとにページを追って分析する⁽⁶⁾。

3.1.1 導入部

1 ページ目

両グループ共、「ここはどんな場所だと思いますか」という問いに対しては、グループの2名を除き「レストラン」と答えており、ほとんどの読み手が均質なスキーマを起動させている。

その上で特徴的なのは、グループの読み手が精緻化推論を行っている頻度の高さである。14人のうち、最初の1ページで精緻化推論を行っていたと推定されるのは6人（3、5、6、10、13、14）。その内容は今後の展開、結果を予測する推論（推論タイプ（7）読み手5、6、10）、既有知識とテキスト情報のすり合わせから「変な状況だ」「とくべつな食べるところです。でもふつうのレストランのようなところじゃない」という状況に対する推論（推論タイプ（11）読み手3、14）などである。同じ状況に対する推論でも、店内の椅子やテーブルの色や配置などを詳細な様子を述べた13もある。

表 3-1 「人間が料理として食べられてしまう場所」という読みにたどりついた読み手（グループⅩ各ページのテキスト本文については、表 3-2 参照）

	1ページ	最初の質問	2ページ	3ページ	4ページ	5ページ	6ページ	7ページ	最後の質問
1		aここはレストランですb二人は中へ入って、すわります		④「ぬってください」のかわりに「のんでください」。(それならわかる)	⑥水？ずのようなにおい？(かぜをひいてまちがえた、それとおりだと思った)	⑦(人間を食べ物のかわりに)⑧来た人を食べる(事実には合わないが不思議な店だったらあるかもしれない)			aここはふつうのレストランではない。人を食べ物のかわりにして体験させるところb逃げてよく
2		aレストランですb食事をする		④?	⑤⑥食べ物になるかもしれない				aふつうのレストランじゃない。おにのレストランかしら
3	(ふつうのレストランは人が多いところにあるから「町はどンドンさびしくなってきました」愛と思いました)	a食事ができる場所b食事をする	②どうしてドアにこのような文字が書いてあるのか、ふつうのレストランはドアはひとつです③レストランで食べるのにこのような資格がある？(注文の少ないようりは食べられないのか)	④おかしと思う(どうして？ふつうのレストランは絶対こんなことをしない。外は美味しいとすりのクリーム。牛乳のクリームは愛)	⑥これもおかしと思う。(酔いのようなにおい。これはたぶん調味料だと思った。変な命は危ないど・・・塩は大切な調味料)	⑦これもおかしと思う。(2人は店に注文するのではなくて、店が来た人に注文している。⑧来た人！(食べる)	⑧店から注文していると思った⑨来た人(事実には合わないが不思議な店だったらあるかもしれない)	⑩この声の内容はともおかしくない。(お客さんは食べる人じゃなく食べてくれる人。「フライになりたいですか」これが一番こわかった)	
4		aレストランb食べます	③(注文はたくさんしなければならぬと思いました)	④(外が寒いからクリーム)	⑥(入口まがえてキッチンへ行った?)	⑦鶏肉や豚肉に塩をぬってくださいますか?	(人でよりうりを作る?)		aおぼけがいるレストラン逃げ出す
5		aよりうりを売っているレストランbおます。食べると思います。たぶんあとでお酒を飲みすぎて、よっぱらうかもしれません。そしてふしぎなことがあつたかもしれません(国で似た話があります)	②(想像通りになるかもしれない。たまされてその後食べ物になるかもしれないと思った。太った方、いいエサです。また、肉に羊の肉は否ければ若いほど大きいということわざがあります)	④わたしのそうぞうは少しありません。ふしぎなことはあるかもしれないですが、ちょっと思ったとおりではないです。(どうしてクリームをぬりますか?)	⑤⑥せんぜんちがうと思いません。私は、お酒を飲んだことが好きな人たちをこし変えるために、なにかがおくと考えてしまいました。	⑦そうぞうはせんぜんちがう思いません。	⑧たぶん、これから不思議な動物に二人を食べさせるのかもしれない。(2人は注文しないで注文された)	⑩(えさになると思った)	たぶん、この所は食べるのが好きな人、特に太い人は「好んで食べるのはよくない」ということをしらせる所でずぶふしぎな場所に入ってしまったことをこういする
6		a中へ入ってびっくりました。レストランではなくて、ひろいお部屋がありました。いろいろなとりどうぶつのおえがいましたbたりばな女にいます	②わたしのすいそくとせんぜんちがう「早くここかのテーブルにすわりたいな」私のかんがえの場合にはテーブルがない	④知らないクリームですか、ちよつとあふないとおもいます。たとえば、クリームをぬるとしよりになります。じゃ、あとでどうするか...	⑤水をかけると、ふつうのかんがえめずらしいかみになりました⑥席のおいがするの。は、どうしてかわかりません	⑦たぶん男は自分てほかのものえさになりす(塩は調味料ですから)	⑧私もおかしと思います	⑩かんがえはただしかな？(食べられるから)	aにんげんのレストランじゃない。ほかのいきもののレストランですb二人はたべられてしまったかもしれません
7		aレストランbごはんを食べます							
8		aたべるところですbふたりはこのうちにはいったあと、西洋よりうりをたべるとおもいます	②③ふつうのレストランとちがいます。でもどなたとちがうですか、まだはつきりわかりません。	④さしいよわたしはたべるところと思います。でもこれまたたべるところではありませぬ。ドアがたくさんあります。かつどうもたくさんです。	⑤⑥いまのかんがえはこのうちにんげんのうちではありませぬ。おのうちかなとおもいます。さしいよいろいろいしりょうりのためです。きゅうにゆうとか、すっぱいみずとか。	⑦おいしいりょうりのため、いろいろなり方をします。たぶんはおいしいりょうりになると思います。			aにんげんをたべるところですbりょうりになります
9		aここはレストランですbこれから二人はよくじをするつもりです	(よくわからなかった)	④(特別のレストラン。牛乳は体のためにいい)	⑤(いみがよくわかりませぬ)	⑦おかし！ しおのことは...	⑧たぶんあの人はりょうりに困るとき使う)	⑩たぶん二人はりょうりになります	aGanibalのためのレストランbりょうりになります
10		a西洋のふんいきの食べるところですかbthe machineに入ってから別の場所に行く	storyはわたしのいけんぞんぜんちがいます	④びんのなかのものは牛乳のクリームでした。「外が寒いから」さむいところかな	⑤どうしてたべるところなのかに、みずをかける？マッサージャー？	⑦塩がどうしてひつようなのか？塩のすな入るところ(塩のそばに砂を入れるようなところ)	⑧この二人は食べ物になるかな。Hense&Gretel聞いたことがありますか。	⑩what would you like to be eaten? わかったかな？	aおぼけの家です。おぼけはどてもおぼけがほしているから、おきやくさんがほいでず。b食べ物になる
11		a小さい町ですb食べてみる		④「外が寒いから体のためだよ」おんせんかな	⑤けんきゆうセンター	⑦レストランのキッチンに近いところ	⑧来た人を食べるかな？		aレストランのようなところb食べられる
12		aこの場所はむかしのレストランですbわたいたいから、たぶんりょうりを食べるとおもいます	②かんがえはたせんぜんちがいます	④びんがひとつ。びんの中のクリーム。牛乳のクリーム	⑤みずことは考えませんでした(さしいよの考えでは思いつかなかった)		⑧⑨⑩もうわかりました来た人をでりょうりをつくる		aどうぶつのレストランと思えますb二人はこんかいのことをおぼえていて、このへんはもうきません
13		aせまいけどあかるいところ。人があまりいません。かべがちなさなでかざつてあります。4つのまいきのテーブルがまどのそばにならんでいますb二人は中に入つてまわりを見てからひだりの一番さいごのテーブルに行きました。いすにすわつてウェーターをよびました	②(若い人だったら太つてないはず) ドアがたくさんありますね。(レストランの人は冗談が好き)	④(クリームをつけるのは、レストランじゃない。Make a foolするところ。ドア、ドア、ドアだけで結局食べられない。国の笑話に似ています)	⑥おいがすると思いません(make a foolのいいアイデアだと思った。される人はかわいそう)	⑦そのまちは人を食べる人ですんではないか。(塩はりょうりを作るものだから、この人たちがりょうりを作るのではないかなと思いましたが。(体に塩をつけても小さくて見えない。だからmake a foolできない)	⑧(来た人を食べると思いますが、まだわかりませぬ)	⑩二人はドアをこしあげて見ます	aここは驚かすところだと思えます。このレストランで人を食べられるではないかb二人はこれからドアをあけて、入らないうちを見ます。何かこわいことを見たか、後ろを向いて走ります(太った客かみげいそのほかを見て、全体的に食べられるのではないかと考えた)
14	(「レストランでは「えんりよしないてください」と「えんりよする」はしよですか。)	aどくべつを食べるところです。でもふつうのレストランじゃなければそこに入つてそのところの人に食べることについて質問します		④びんとクリームとせんぜんちかんげいがない	?		⑧来た人を食べます。この二人は食べ物になりす。おにといきておもしろい	⑩⑪dream	aおぼけのところ/dream/とくべつたべるところb二人はたべものになりす/awake from dream

表 3-2 「人間が料理として食べられてしまう場所」という読みにとどりつかなかった読み手（グループ）

	1ページ	最初の質問	2ページ	3ページ	4ページ	5ページ	6ページ	7ページ	最後の質問
	二人の男が、みちをあるいていました。まちがだんだんさびしくなってきました。 「おなかをすいたなあ」「ほくもすいた。もうあんまり歩きたくないよ。ああこまったなあ。なにが食べたいなあ」 そのとき、二人は大きな家を見つけた。 ガラスのドアのまえには、こう書いてありました。 「レストラン」どうぞおはいりください。①えんりよしないてください 二人はドアをあけて、中へはいりました。	さいしょの質問 aここはどんな場所だと思いますか b二人はこれから何をしますか	レストランにはいると、またドアがありました。ドアにはこう書いてありました。 「②とくに太ったかた、若いかたは、かんけいします」 ろうかがあるいて行きますと、またドアがありました。ドアにはこう書いてありました。 「③このレストランは、ちゅうもんの多い、レストランです。よろしくおねがいします」	すこし行きますと、またドアがあって、その前にガラスのびん一つありました。ドアにはこう書いてありました。 「④びんの中のクリームを、かお、手、足にばんぶぬってください」 みるとたしかに、びんの中のものも牛乳のクリームでした。 「クリームをぬってください、というのはどういうことだ。」 「これはね、外がさむいから、体のためだよ」	すこしいくと、また次のドアがありました。 「りょうりはもうすぐできます。すぐたべられます。⑤はやく、あなたの体に、この塩をたのみに水（みず）をよかけてください」 ドアの前には水のびんが、おいてありました。 二人はその水を、あたまにかけました。⑥ところがその水は酢（す）のようなにおいがするものでした。 「この水はすっぱいな。どうしたんだろう」	次のドアには、大きな字でこう書いてありました。 「⑦この水がおいしい。この塩をたのみに水をよけてください」 目の前に、白いびんがありました。	二人ともびつくりしました。 「どうもへんだよ」 「はくもへんだと思う」 「⑧たかさんの注文というのは、レストランがこちらへ注文してはるんだよ」 「⑨このレストランは来た人によりょうりを食べてもらうのではなくて、来た人を……」 ⑩二人はもう、何もいえませんでした。	ドアの向こうから、こんな声がきこえます。 「お客さん、はやくりっしやい、いらっしやい。お血もあらってありますし、レタストマトもありませんよ」 「へい、いらっしやい、いらっしやい。⑪サラダはおさらいですか。それともフライになりたいですか。とにかくはやくいらっしやい」 ⑫二人はもうこわくてこわくて、何も言うことができませんでした。	さいごの質問 aここはどんな場所だと思いますか b二人はこれから何をしますか
21		①レストランです②食事します		④レストランだったらそういうことをしません	⑤食事したらどうして頭に水をかけるのか、おかしいと思	⑦二人はぜんぜん注文をしていません。まだ、どうして塩は体中にあるかわかりません			⑧ダイエットのための店だと思います。b二人はこれから逃げたいと思います
22		aここはレストランだと思います。bMENUをよんで、りょうりをちゅうもんすると思います	②どうしてこんなことが書いてありますか。ドアが多いです	④おかしいレストランだと思って、こりきんがでてきました。（食べ物、たぶんありません）	⑤⑥おもしろいレストランだと思っています。（具体的に考えない）	⑦思ったとおりに本当にめんどうかいレストランなの、おもしろい。	⑧⑨⑩このレストランはふつうのレストランとちがうはずですが、どんなレストランか	⑪（他ならないと思います。お客さんを僕つてりょうりを作ります）	aレストランじゃなくて、お客さんをじゃらす遊びの店だと思いますbこのレストランから逃げます
23		レストランですb食事します		④クリームは食べ物でなくてぬるものだから、食事には関係ありませんと思います	⑤この文も食事に関係ありません。食事するために行ったのに、頭に水をかけたのは変です	⑦（必要だったら塩を入れてたべてください。のみみはOK、でもどうしてぬる？）	⑧（ふつうの店はお客さんが注文、店は聞くだけ。この文では逆）	家でですか	a最後のページで見たらレストランかなあと思いましたb二人はこわくて、にげます
24		aさびしい場所だと思います。b二人はこれからレストランで食べに行きます		④（クリームは食べ物かくすりかどちらか、くすりのクリームだったら差の意味はわかるが、ここはレストラン）	⑤「すっぱい」はふつう食べ物はぬらないけど、サウナではぬる。でもサウナではない、すっぱい水？	⑦塩・・・ふつうは食べる時はぬらないけど、サウナではぬる。でもサウナではない、すっぱい水？	⑧（店がお客さんにいろいろ注文している）・・・ちがう、このレストランでは自分の好きな材料を店に注文して、自分が作る	家でですか	a普通のレストランではなく、セルフサービスのレストランだと思いますb二人はこわいですから、何もいえなくてすぐ帰るかもしれません
25		aレストランですb食事します	どうしてりょうり店にはたくさんドアがありますか（この食事をした方が、大っぴらな人はやせて、若い人はもつと若くなって健康になると思った）	④どうして食べる前にこういうふうにしますか？	⑤食事をする前に水をかける目的は何ですか。水というのはうそつきです。実際は酢です（食事前には水をかけるのは必要ない。酢をかけるのは体にいい）	⑦りょうり店で体に塩をぬるの不思議です（温泉のような場所かと思った。レストランと書いてあるがそれは客を呼ぶため）	⑧（客は自分で材料を持ってきて・・・作ってもらう）	レストラン言いますが、じつはサウナですから、家でですか	a病人が運送している浴槽と見えますbシャワーをあらうまえに自分の体をよくきんとします
26		aりょうかんb泊ります	りょうかんではなくレストラン。りょうりを注文しますから		⑥酢？		⑨来た人を飲み物もらいます	⑩こわくてこわくて・・・	aレストランbたべます

一方 グループの読み手の中では、6人中1人だけが「ここはどんな場所だと思いますか」という問いに対し「ここはりょかんです。レストランはりょかんの中にありますから(26)」と推論を発生させている⁽⁷⁾。

、 グループの対比として一つ典型的な例を挙げれば、1ページの「町はどんどんさびしくなってきました」という一文に対し、グループの読み手3は「ふつうのレストランは人が多いところにあるのに変」と述べ、一方 グループの読み手24は「ここはどんな場所ですか」という問いに対し、そのまま「さびしい場所です」と答えている。データで見ると、グループの読み手は グループの読み手に比べ、冒頭1ページですでに推論(精緻化推論)を多く発している。

では一貫性のチェックについてはどうだろう。読み手3,4は既有知識とテキスト情報をすり合わせて「変な状況だ」という状況に対する推論を行っているが、この「すり合わせ」は一貫性のチェックと捉えることもできる。「レストランは人が多いところにある」「お店は『遠慮しないでください』とは言わない」などの既有知識とテキスト情報がかみ合わないことを、この二人はすでに気づいており、その結果読み手4は「ここはどんな場所ですか」という問いaに対し「ふつうのレストランじゃない」と答えるなど、他の読み手より一歩先んじていることがわかる。

2 ページ目

グループのうちの何人かは、「そうぞう通りになるかもしれない」「わたしのいけん(かんがえ)とぜんぜんちがいます」というメモを書いており(5,6,10,12) これまでの読みとテキスト情報の一貫性のチェックが行われていることがわかる。そのほかに「ドアが多い。ふつうのレストランでは一つだけ(3,13)」など既有知識とテキスト情報の一貫性についてのコメントも見られる。

グループでもドアが多いことについての言及があり(22,25) 当初「ここはレストランで、これから食事をする」という理解を7人中5人がしていながら、こちらのグループでもレストランという設定とドアの情報に一貫性がないと受け止めている読み手がいることがわかる。

ただし両グループとも、疑問を持ちながらも読み手は一貫性が形成できないでいる。

3.1.2 展開部

3・4・5 ページ目

ここでは 牛乳のクリーム、 酢、 塩を、順に体に塗るようにと指示される。クリーム
の指示が出た時点で、グループともに「レストランではそんなことをしない。食事と関係がない」というコメントが散見されるが、その後酢、塩と続くに至って グループ14人のうち5人が日常生活で得た既有知識「塩は調味料」を根拠に、男たちが食べ物にされると推論している(1、

第2 言語学習者はテキストをどう読んでいるか

3,6,8,13) ことがデータで確認できる。今回の調査をデータから振り返ってみると、グループの読み手が「いろいろな注文は、男たちに調味料を自ら振りかけさせるという目的で行われている」という行為の原因の推論(推論タイプ(4))そして「そこで料理を食べることのできるレストランでなく人間が料理として食べられてしまう場所である」という理解に至ったのは、実はこれら調味料の手がかり、特に塩の手がかりによるところが大きかった。

レストランで食事をしようとする男たちへの指示が、実は他者が男たちを食べる前の準備(調味)だったという、簡単ではない推論であるが、推論タイプとしては(4) 読解中に生成されなければならない理解に不可欠な橋渡し推論であり、これが読解の成否を左右したと言える。

一方 グループでは疑問は持ちながらも「なぜ塩を塗るのか」という行為の原因の推論がうまく行かない状態が続いている。「塩は調味料」という既有知識はあるものの、それをレストランという設定で体にぬるということが、うまく結びつかない。中には塩を体にぬることから「ここはサウナ(24)」「温泉のような場所(25)」と読みを転換する読み手も見られた⁽⁸⁾。

3.1.3 終結部

6 ページ目

このページには の3つの手がかりがあるが、ここでは について検討する(については後述)。

「客がレストランに注文するのではなくてその逆」これについては グループでは内容に合致した理解が見られたが(1,3,5) グループでは同様の理解も見られたが(23)、「自分の好きな材料を店に注文して自分が作る(24)」、「(客は自分で材料を持ってきて...作ってもらう)(25)」など、「注文」ということばをめぐり、注文主、注文した相手、注文の中身などの理解がまとまらない状況にある。またこの手がかりを契機に、ここはセルフサービスのレストランという推論も生まれている(24)。

「来た人に料理を食べてもらうのではなくて来た人を・・・」。読後のインタビューでは、ここに言葉を入れてもらったが、グループのデータは、すべて「来た人を食べる」と入れていた(同様の意味と考えられる「来た人をでりょうりをつくる」「来た人を食べられる」などの非文も含む)。一方 ではわからないとする読み手が多かった。

7 ページ目(最終ページ)

「サラダはおきらいですか。それならフライになりたいですか」について、グループのデータはすべて、フライになるというのは二人が食べ物になるという意味であると理解している。

反対に グループでは全員、「フライになりたい」は「フライにしたい(フライを食べたい)」という意味であると解釈していた。「では、たいを使って例文を作って下さい」と言うと、全員

が「先生になりたい」「お医者さんになりたい」などの適切な例文を作ることができた。すなわち「(名詞)になりたい」は文法的には正しく把握しているものの、ここでは「(食べ物)になりたい」「(食べ物)にしたい」という二つの表現で表される状況を読む日本語能力は持っているものの、先行する理解と矛盾する場合、それを越えることは難しいようであり、これ(手がかり)を契機に読みを修正した読み手はいなかった。この格関係の推論(推論タイプ(2))は読みに不可欠な橋渡し推論である。ネイティブスピーカーにとってはそう難しくないが学習者にとっては手ごわいものになっており、外国語で読む難しさを改めて感じさせられた。

「二人はもうこわくてこわくて、何もいうことができませんでした。」これは前ページの「二人はもう、何も言えませんでした」と同様、登場人物の感情を述べた表現であり、の方が「こわくてこわくて」と恐怖心をはっきり前に出している。なぜこわいと思ったんでしょうかと聞くと、グループでは「えさになりますから」「食べられるから」などの答えが返ってくる。

一方グループでは「レストラン言いますが、じつはサウナですから、変ですから(24)」などの返答があったが、変という以上の、「こわくてこわくて」と表現される恐怖心がどうして出てくるのか、説得力のある回答はなかった。

3.2 全体を振り返って まとめ

今回調査のデータから考えられることは以下のとおりである。

テキストの導入部にはほとんど全ての読み手が「ここはレストラン」としておりレストラン・スキーマを利用していると言えるが、二つのグループを比較するとグループの読み手は早い時期に精緻化推論を多く行っている。テキスト情報とともに推論の根拠となっているのは読み手が持っている既存情報であり、その積極的な活性化により早く推論を行い、単語を一つひとつ追うボトムアップ読みよりも、速く効率的に理解を形成することが出来る。また既存知識とテキスト情報の不一致にもより早く気づいており、推論や一貫性のチェックの立ち上げ速度が速いと言える。また早めにスキーマを立ち上げることが、「いけんはぜんぜんちがいます」などと、次に入ってくるテキスト情報との一貫性のチェックにもつながる。

グループの読み手はその後、展開部において、クリーム、酢、塩とを体にぬる、というテキスト情報から、「塩は調味料だから、男たちはこれから食べられる」という理解を形成する。

一方グループでは同じ手がかりに対して「ここはサウナ(24)」「おんせんのような場所(25)」という推論が寄せられるが、その理解はさらに次の「たくさんの注文というのは、レストランがこちらへ注文しているんだよ」という手がかりに反応して「セルフサービスのレストラン(24)」「客は自分で材料を持ってきて・・・作ってもらう(25)」というように変化する。新しい手がかりに対して発生した推論が、それ以前の手がかりも含め、一貫性をもってつなぐ推論となりえているかという疑問が残る。

第2 言語学習者はテキストをどう読んでいるか

またその過程で、学習した文法事項（本調査では「～になりたい」）を有効に利用できていない、ということも見られた。

まとめれば、本調査における グループの読み手による読解の過程では、物語の導入部から既有知識の活性化、推論の発生が多く見られ、それに付随して既有知識、発生した推論、テキスト情報との間のすり合わせを行うなど、部分的な一貫性のチェックが観察された。また展開部では主要な手がかりを、全体をつなぐ一貫性の形成へと結びつけることができています。グループ読み手の読解では既有知識の活性化、推論の発生などの頻度も少なかった。また一貫性の構築も部分的なものにとどまり、全体を見渡した一貫性をどう形成するかが課題として残っている。

読解過程は外見から観察しにくく、その理論は常に妥当性についての議論にさらされていると言える。本稿では現場の教師として学習者の学習過程を分析する際のバックグラウンドとして利用したが、今後とも背景にある理論については妥当性に十分留意して行くとともに、有用な部分を教育的な活動に利用していきたいと考える。なお今後は本稿では取り上げなかったテキストのジャンルなどにも留意して行きたい。

さいごに、調査協力者となってくれた H14 年度 3 月長期研修生に心より感謝したい。

〔注〕

- ⁽¹⁾Minsky (1975) はフレームという語を用いて、特に典型的な状況で使われるスキーマを説明した。
- ⁽²⁾また Schank, R.C and Abelson (1977) は「われわれが外界に対してもっている知識の一部はステレオタイプな状況とそれに伴うルーチン化された行動を中心に構造化されている」と主張し、連続性を持つ「スクリプト」を提案した。
- ⁽³⁾潜在意味分析 (LSA : Latent Semantic Analysis) とは、河原の解説 (2001 : 99) によると、Landauer と Dumais によって開発されたもので、多量の文章コーパスにおける単語の共起関係に対して、因子分析の一般化である特異値分解を適用する潜在意味分析を適用する分析である。「LSA の学習過程は、一つひとつの単語が一つひとつのテキスト文脈に出現する回数をカウントすることから始まる。たとえば、百科事典を用いた例では、約 30,000 の段落に 35,000 の異なる語が含まれていた。こうして段落×語の巨大な行列が得られる。LSA は、この行列に特異値分解を適用して、空間の次元を大幅に縮減する。すなわち、特異値の大半を捨てて、大きいほうから 300 程度を保持する。この 300 次元の意味空間では、元の行列における語や文書をベクトルとして表現することができる。また、新たな語文書をこの空間に挿入して、お互い同士や下の語や文書とのあいだで類似性を計算することもできる。LSA による語の意味の学習能力は非常に強力であり、実用的な水準に達するものであった。百科事典の例では、分析から得られたベクトルを用いて、標準語彙テストの解答を選択したところ、LSA の成績は中程度に優秀な学生（合衆国の大学に合格した外国人応募者の TOEFL）の成績に匹敵するものであった。」「LSA が示した優れた学習・一般化能力は、知識表現の基底となる特性として、客観的で再利用可能な集合を選択できる可能性を示唆している点で、きわめて重要である」という。英語では既にこの値を測定することができるインターネットサイトが研究者らによって作成、運営されている。http : //lsa.colorado.edu/

コーパスや分析の適切性、日本語での有効性など今後検証されるべき点も多いが、コーパスに表された語や文の意味空間をベクトルや数値によって具体的に表現する新しい試みだと言える。

- ⁽⁴⁾日本語教授法などの研修を受けている外国人日本語教師

- ⁽⁵⁾メモや聞き取りといった方法では読解における無意識のプロセスを追いかけることはできないが、意識上にあるプロセスに関してはメモに加え聞き取りをすることで読み手自身に詳しくプロセスを開示してもらうよう努めた。ただしこれらのデータは何れも読み手の自己申告であり、また読みながらのメモデータ、読後の聞き取りデータには、読み手が考えたことが、意識上の読解過程であってもすべて開示されているわけではない。考察はそれらの点を踏まえて、グループごとの大まかな傾向の分析という形を採った
- ⁽⁶⁾なお、読み手が全員コース内試験において日本語能力試験3級相当の実力は持っており、うち半数は2級合格の実力も持つことは前述の通りだが、日本語能力試験での実力が必ずしも今回調査でのパフォーマンスに結び付くわけではなかった。例えば本調査でグループであってもコース内試験（読解部分のみ参照）で低い成績を収めたものもいれば、グループであっても同試験で高い成績を収めていた者もいた。
- ⁽⁷⁾因みにこの読み手は自国では観光関係の仕事をしていた。
- ⁽⁸⁾なおこれは一つには「塩は調味料」という手がかりから、虚構の世界を構築するということに対する慣れの違いもあったのではないかと推測され、今後の課題としたい。

〔参考文献〕

- 阿部純一、桃内佳雄、金子康朗、李三五 (1994) 「文章理解過程 基本的問題と概括的把握」200-235 p 『人間の言語情報処理』サイエンス社
- 沖山禎子 (1991) 「『注文の多い料理店』の授業実践」『隔月刊・国語の授業』100号、22-49p 児童言語研究会
- 河原哲雄 (2001) 「文章理解のコンピュータ・シミュレーション」98-99p、大村彰道監修、秋田喜代美・久野雅樹編集 『文章理解の心理学 認知、発達、教育の広がりの中で』北大路書房
- 菊池民子 (1997) 「日本語の読解におけるテキスト構造の影響と読解前指導の効果」『日本語教育』95号、25-36p
- 杉山ますよ・田代ひとみ・西由美子 (1997) 「読解における日本語母語話者・日本語学習者の予測能力」『日本語教育』92号、36-47p
- 三門準 (1995) 「文学作品の教材化 『注文の多い料理店』を例に」『日本語教育研究会』30号、134-145p 言語文化研究所
- 宮浦国江 (1997) 「人はいかにユーモアのある話を理解するか 推論生成とメンタル・モデル」『日本認知科学会第14回大会予稿集』158-159p
- 渡辺由美 (1998) 「物語文の読解過程 母語による再生と読解中のメモを通して」『日本語教育』97号、25-36p
- 中島義明、安藤清志、子安増生、坂野雄二、繁樹算男、立花政夫、箱田裕司 / 編集 (1999) 『心理学辞典』465p 有斐閣
- 宮澤賢治 『注文の多い料理店』 <http://www.d1.dion.ne.jp/~ueda_nob/authors/kenji/kenji.html> 2002年8月30日参照
- Alderson, J.C. (2000) Variables that affects the nature of reading *Assesing Reading*. 32-84p Cambridge Univ.Press
- American Council on the Teaching of Foreign Languages : ACTFL 言語運用能力基準 - 話技能 (1999年改訂版) <http://opi.jp/shiryo/actfl_guide.html> 2004年9月26日参照
- Bartlett (1932) *Remembering : a study in experimental and social psychology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rumelhart and Ortony (1977) The representation of knowledge in memory. *In schooling and the acquisition of knowledge*. Richard Anderson, Rand J. Spiro and William Montague (Eds.) 99-135. Hillsdale, New Jersey : Lawrence Erlbaum Associates

第2 言語学習者はテキストをどう読んでいるか

- Carrell,P.L. (1983) Schema theory and ESL Reading pedagogy. *TESOL Quarterly*. Vol.17 No.4,Dec 553-573
- . (1984) Schema theory and ESL reading : classroom. *The Modern Language Journal*, 68iv332-343
- Grasser,Singer,Trabasso (1994) Constructing inferences during narrative text comprehension. *Psychological Review*. 101, 371-395
- Kintsch,W. (1995) *Comprehension : A-Paradigm for Cognition* (49-199) Cambridge University Press.
- . (1988) The Role of knowledge in discourse comprehension : A construction-integration model. *Psychological Review*,95. 163-182
- Latent Semantic Analysis@ CU Boulder<<http://lsa.colorado.edu/>>2004年6月30日参照
- Minsky (1975) *A framework for representing knowledge*. in P.H.Winston (ed)*The Psychology and of Computer Vision*. New york : Mcgraw-Hill
- Shank ,R.C. and Abelson, R. (1977) *Scripts, Plans, Goals and Understanding*. Hillsdale, NJ : Erlbaum.
- van Dijk, T. A., & W. Kintsch. (1983) *Strategies of discourse comprehension*. Academic Press